A-WASS 通信　3 号

編集：木と建築で創造する共生社会実践研究会

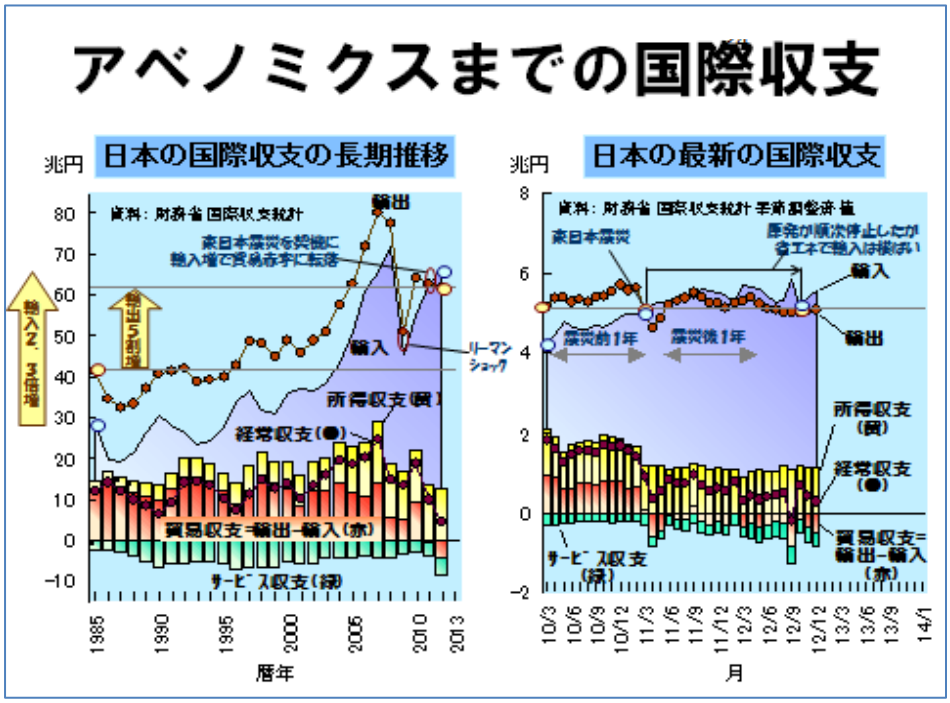
藻谷氏講演会報告

藻谷氏

日　時　平成 26 年 5 月 31 日（土）15 時～17 時
場　所　法政大学
演　題　「里山資本主義は庶民のセイフティーネット」
講　師　藻谷浩介氏

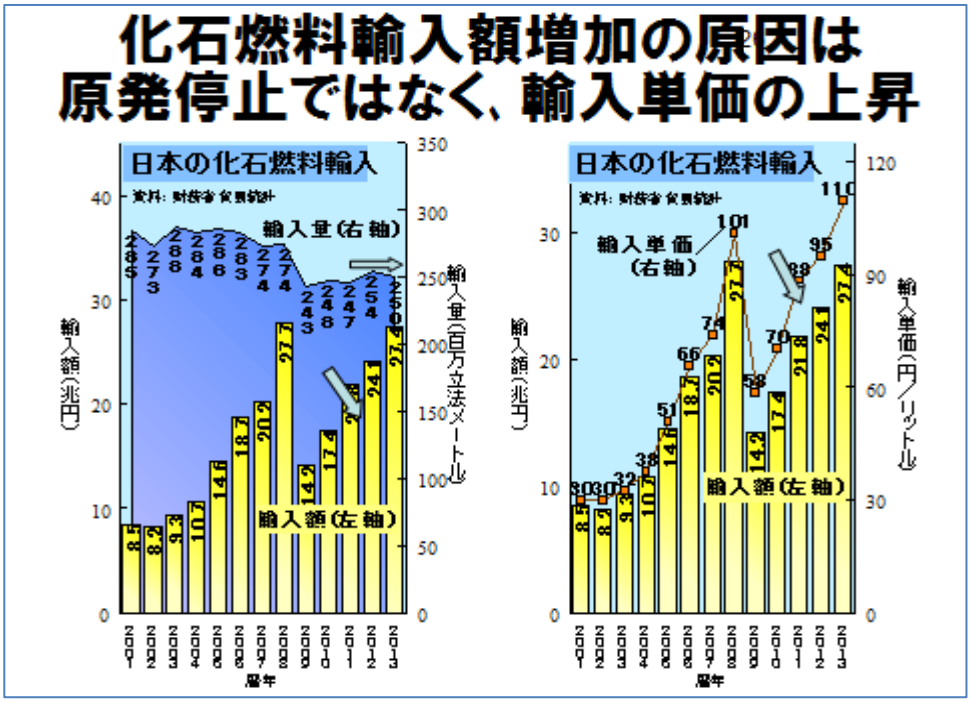
藻谷氏の講演内容を、スライドとコメントを編集して報告します。藻谷氏の講演趣旨と異なる場合は編集者の責任です。　（A-WASS 事務局　花岡）

藻谷さんは、最初にご自分の立ち位置を述べられました。「自分は専門家ではない、評論家である。心がけているのは根幹的に間違ったことは言わないということ。敵味方はなく、敵だった人にも極力事実を言うようにしています」・・デフレの正体の著書で、誰でも調べられる資料を基に、デフレは生産人口(18 歳～60 歳)の減少が原因という構造的な問題を提起されました。



最近の経済問題、「国際収支・貿易赤字への転落は、原発が停止されているためだ」という論に対して、

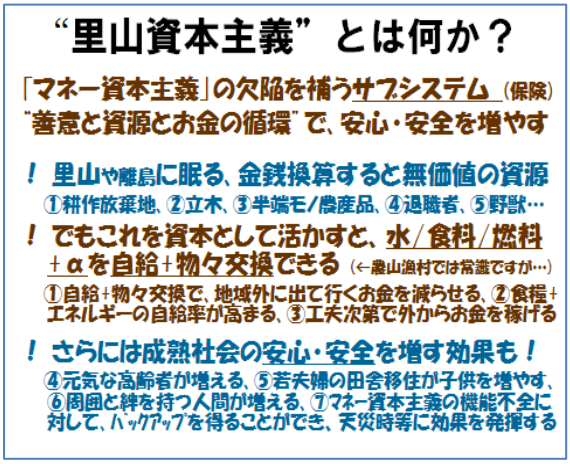
「わが国の輸出は 1985 年から 2012 年の野田内閣まで輸出が 5 割増えているという事実をみんな知らない。しかし何が悪いかというと輸入は 2，3 倍になっている。それは原発を止めたからではなく石油の値段が上がっているからで、実に 5 倍に増えている。それでも円高の時は良かったのですが、アベノミクスによって同じ量を輸入していても値段は 1.3 倍になり輸入品の総額が一気に上がりました。でも石油代は輸入総額の 3 割程度でしかなく、円安による輸入品が全体として値上がりしたということです」

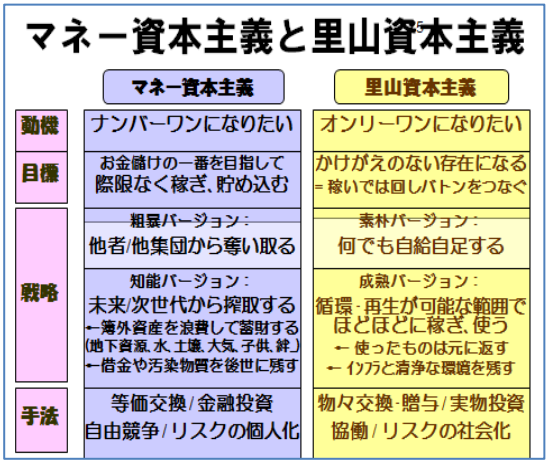


油の値段が上がったことによって、一気に木を伐って燃やすことが採算化しました。・・化石燃料は上下することはあるが、全体では上がっていくことは確かです。そういうわけで木を使う取り組みの採算性は増していくのですが、一つ大きな問題があります。それは、木をすべて燃料(発電)として使ってしまおうとする動きです。それをやることは間違っている。・・今の状態（電力の固定買取制度）だとチップにするだけで採算はとれますが、できるだけ木材として使ってから、燃料にしてほしいです。オーストリアのように綿密に計算して森林管理をしていく必要があります。日本はオーストリアよりはるかに降雨量も日射量も多くて木が生えます。日本は林業を放置してきているが、太陽エネルギーは森林に蓄えられている。なんと恵まれているのでしょう。しかし、日本がオーストリアのように新たに生える木（木の成長分）の 7 割、いや 10 割使えるとして、日本のエネルギー使用量のいくらをまかなえるかというと現状では 3%程度だそうです。これは全国でという議論はあんまり意味がない。日本にもオーストリアみたいな地域がいっぱいあるのです。例えば東北 6 県です。2, 3 か所を除いて自動車工業や製鉄の高炉（エネルギー消費量が著しく多い）もありません。だから田舎だけで、自然豊かなところでやればいい。オーストリアになれない名古屋と大阪と東京近辺はほっとけばいい。その一帯に全人口の 5 割の人が住んでいるので、残りの 5 割がやればいい。

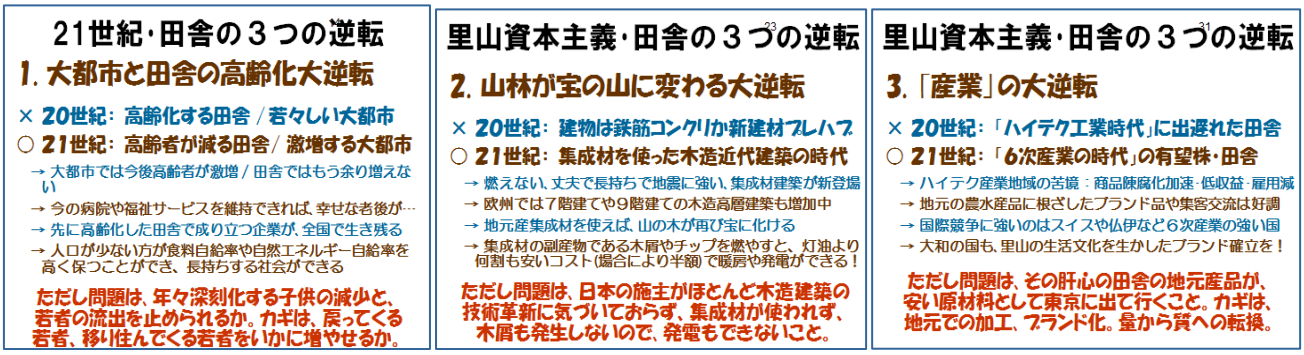
サブシステムとしての里山資本主義

里山資本主義とはマネー資本主義の欠陥を補うサブシステムです。メインではありません。マネー資本主義はお金を貯めこむのですが、里山資本主義はお金とともにそれ以外の善意や資源を回し循環します。何を回



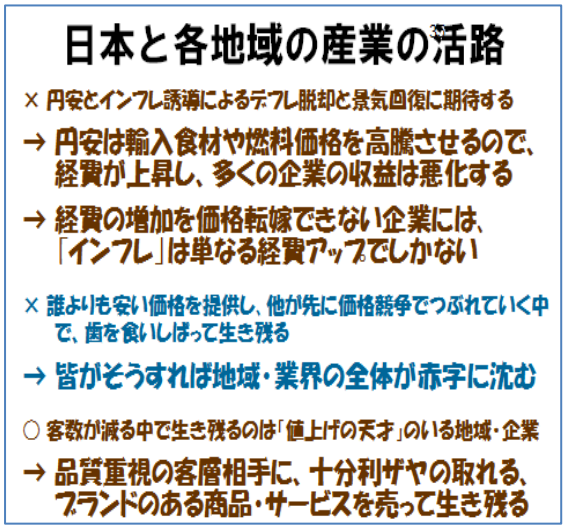


すかというと、里山や離島に眠る金銭換算すると無価値の資源を回し、水と食料と燃料+α(工業製品)を自給と物々交換できるようにするということです。



この大逆転時代には、田舎に通って産品を買い絆をつくっておくことが大切です。もう少し進めば、畑などで作物を育て自家消費ならびに物々交換することをお勧めします。たとえば特定の田舎に田畑もしくはセカンドハウスをつくる。最後には好みの田舎に移住する。季節ごとに転々とするようになったらなおいい。嫌なら都会に帰ってくればいい。里山資本主義はサブシステムなので、その状況に合わせてやっていけばいい。

「里山資本主義」は国際競争に貢献している



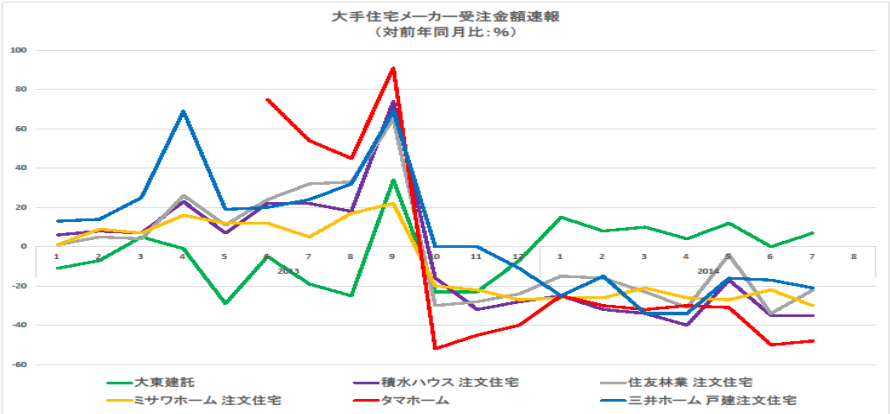
化石燃料代は貿易赤字の原因で年間 20 兆円を超えているので、田舎で木を燃やすごとに国際競争に貢献しているのです。食料輸入は 5 兆円程度だが、家庭菜園で自給している人も貢献しているのです。

みなさんが黒字を稼いでいると思っている車や電子部品は油代とトントンです。原子力を再稼働しようとしても処分費など入れたら大赤字です。これからは田舎で勝つ時代で、都会に人を集めて机上の空論をやっている時代ではありません。是非みなさんも現場に行ってできることを見つけてやっていってほしいです。

※藻谷さんは、講演の冒頭で「すでに、先進的に現場で動き始めている方々に怒られるかもしれないが」と話し始められました。お話を聞き終って感じたことは、「時代の空気を捉えているが、物足りない」でした。木の建築も進めていく中で RC 造全盛時代から転換するには、技術、制度、人材、木の流通などなどに多くの課題があり、こんがらった糸を解す努力が必要です。木質バイオマスもチップ発電で活用される熱は 2 割、あとの 8 割は捨てられるのが日本の現状です。熱利用のモデルこそが大事なのです。一過性のものではなく、持続可能で、地域や森で循環できる自然と人々の共生社会をつくる努力を続けることが日本中を駆け回り、真摯に取材される藻谷さんとつながる途だと確信しました。 (花岡)

二国レポートⅢ

技術革新により未利用材の用途が広がりつつある



前回からの継続で、大手住宅メーカーの対前年比の受注額速報の推移を確認しておく。7月も受注は前年比 2-5 割減。賃貸住宅は好調。

これを、月別の木造住宅着工実数で見ると「昨年の消費税前駆込み（押込み）は下回るものの、2012 年並みには着工している」実態が見えてくる。

予算総額 560 億円、8 月までの累計ポイント発行額 207 億円の木材利用ポイントの効果と見るか？見方は立場により異なる。

6 月にフィンランドの Miktech と言う技術革新＋ビジネスサポートセンターの招へいで、フィンランド南東部を訪れた。同地域は 1980 年台から IKEA 家具用のパイン材供給地だったが、IKEA が一切北欧材を使用しなくなってから廃れ、新しい用途開発＋輸出先を探しているもの。確かに 1980 年台前半までの IKEA は「北欧パイン家具」が売り文句だったが、一旦日本から撤退し、2006 年に再度進出した時は「北欧デザイン家具」と変わっており、使用されている木材には北欧パイン材は皆無となり、ラバーウッド、ラジアターパインやポプラ等となっていた。これらは未利用木材であったり、人工植林早成樹であったりして、かつては廃棄物や梱包用としての用途しかなかった木材。技術革新により、家具として安価＋大量に使える様になったもの。同社の「持続性レポート」には明確な考え

方が出ている。

最近流行となっている「木質バイオマス発電燃料」にしても、パームヤシの油搾りかすである PKS が注目をあびている。木質バイオマス原料を効率良く使用する為に木質ペレットを炭化させる技術開発競争が欧米で進んでいる。
これらの「技術革新」は従来廃棄物であったり、未利用材で朽ちるに任されていた木材資源を利用するものであったり、地球環境にも優しく「持続性」に富んでいる。北米で合板に代わる面材として普及している OSB は薪炭材にもならない大量のドロノキ（Aspen）の利用方法から開発されたチップボード。いずれの技術革新も未利用木材を利用して、従来の製品より**「良い物を安く大量に」が大前提**。残念ながら日本では OSB 製造技術・工場もなく、炭化ペレット製造技術・工場もない。

40-50 年前の木材バブル期に、「将来儲かる事を前提」に植林したスギやヒノキが成長し、伐期に来ても、従来と同じ用途に拘り、再植林経費が出ないと補助金頼り。これでは余りにも進歩がなさすぎる。

会員セミナー報告

会員セミナーが活動を始めました。研修会が一般の方々も対象にし、視野を広げるために幅広い分野の講師を招いて開かれるのに対して、会員セミナーは研究会の目的を達するために（１）木の学校づくり実践への課題整理　（２）木質バイオマス活用の途を拓く　（３）「木はいいのだ」研究のまとめをテーマとしたものです。

第 2 回会員セミナー「木質バイオマスそもそも講座１　燃焼炉あれこれ」
6 月 7 日、森の贈り物研究会を会場で、トモエテクノ社岡本社長を講師に「そもそも講座１」が開かれました。「そもそも講座」と銘打ったのは、日本では「木質バイオマス」とは何かということが不分明だと考えたからです。「学校の暖房にペレットストーブを入れたが、不具合が多くて石油に戻った」「補助金で燃焼炉を入れたが、試行期間が過ぎたらチップ倉庫にシャッターがおりた」「寒い朝はチップボイラーの熱量が足りなくて、2 時間重油ボイラーを使うことにしています」などなど。分からないことをそのままにしないで、一から学ぶ講座にします。岡本さんは、主に「ボイラーの仕組みについて」お話し下さいました。参加者からは「バーク」を燃料にできないか？外国製のボイラーと日本製のボイラーのちがい、など大事な質問が出ました。今後、成功事例の視察、ボイラーの性能比較など具体的に講座を組んでいきます。

第 3 回会員セミナー「A-WASS の木の学校づくり、山から町までのフロー提案」が、7 月 5 日森の贈り物研究会で開かれました。WASS の 5 年間の調査・研究で得られた「木の調達」「設計者選び」「無駄なく木を使う工夫」「施工者の問題」「文化としての木の建物との付き合い」を最新の事例もふくめ、A-WASS フローとしてまとめ首長さんたちに提案していきます。網野会員、浦江会員を中心に院生の方々の提案を基に、会員諸氏の経験・意見でつくり上げていきます。　（花岡）

～皆様のご意見を歓迎いたします～
A-WASS 事務局(森の贈り物研究会内)
〒103-0004　東京都中央区東日本橋 3-8-1
東日本橋コーポラス１F
TEL: 03-3249-0421 FAX:03-3249-5133
E-mail:hanaoka@bdvision.co.jp